
僕が好きな人

森宮ゆうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が好きな人

【Zマーク】

Z06500

【作者名】

森富ゆうき

【あらすじ】

あらすじ書くまでもない、短い話です。

めちゃくちゃ短いので、サラッと読んだけたら嬉しいです。

「告白されたんだって！？」

放課後、隣のクラスの深雪は僕の教室に駆け込んでくるなり、大声でそう言った。僕は周囲に聞こえていいか気にしながら人差し指をたてるジエスチャーをする。

「付き合っちゃえばいいじゃない」

ほんの少しうトーンを落として、深雪は言つ。

「んな、他人事な」

とつさにそう答えた。僕は、深雪の言葉をどう否定しようか迷つた。あの子のことを悪く言いたくはない。実際とてもいい子なのだ。だけど付き合えない。僕は他に付き合いたい人がいるからだ。思うのに、答えることはできなかつた。

「他人事なんかじゃない」

とつさの一言が墓穴を掘つて、深雪の笑顔が消えた。その真剣な目からは確かに、その言葉通りの思いが伝わってきた。それでも僕は。

「付き合えないよ」

僕は、深雪が僕の真意に気付いてくれるようつに期待しつつ、その大きくて黒い瞳をちらりと見た。

「相手が中学生だから？ 年なんか関係ないよ。それにたつた三歳差でしょ。なんの問題があるって言つつの？」

ああ、通じていな。昔からこの幼馴染は、鈍感なところがあるのだ。あの子もまたそうだ。僕が深雪を好きなことを察してくれればいいのに。

本当は、僕が今ここで深雪を好きなのだと、直接言えたならいいのだけど。それができない。できなくて、心がすれ違つてしまつ。実際この話で深雪の機嫌を損ねてしまつていい。僕は何より深雪の笑顔が見たいのに。

「深雪は僕のことが嫌いなのか？」

ふと尋ねてみた。きっと、深雪は否定するだらうと思つ。そうしてほしいと願つた。まだ記憶のないような小さい頃からの幼馴染と、未だにこうして一緒にいるのは、嫌われてはいない証拠なのだと思つ。

「そんなことがあるわけないでしょ」

僕は心底ほつとする。こんなふうに深雪に直接気持ちを問うのは初めてで、嫌われていないうだろうと言つのも、僕の勝手な推測で自分自身に言い聞かせていただけだつた。

「私のものにしたいくらい大好き！」

僕は前身の血液が顔に集まるのを感じた。これは、予想外の答えだ。今なら言えるかもしれない。ずっと言えなかつた言葉を。幼馴染という関係に甘えて、越えられなかつた一線を今なら越えられる気がする。

「なら」

僕と付き合つてくれないか?と言おつとすると、間髪入れず深雪は続けた。

「だから、なおさらあの子と付き合つてほしいの」

満面の笑みで言つ。僕の見たかつた笑顔で、そんな残酷なことを。

「だつて、そうしたら将来……」

そこまで言つて、深雪はドアの前に振り向く。

「青木先輩、一緒に帰ります?」

語尾にハートをつけて、あの子が入つてきた。中学生は普通怖がつて、高校生の校舎には入つてこないのだけど、この子はクラスにまで入つてくる。周りをあまり気にしていないのだ。

クラスメイトたちは、その美少女に注目した。そして数人は妬むような目で僕を見た。

ああ神様、僕はこのもう一人の幼馴染、つまり深雪の妹と付き合わなければいけないのでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0650o/>

僕が好きな人

2010年10月11日15時04分発行